

デジタル時代の リスクと保険 (1)

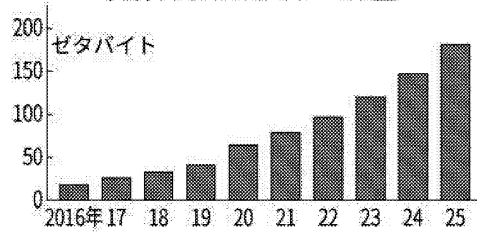
デジタル技術が企業経営から人々の暮らしまで世の中のあらゆることを大きく変えようとしている。ビジネス上や生活上のリスクとそれに対応するための保険も例外ではない。これまでになかった危険に対応しなければならなくなる一方、デジタル技術を使った新しい形の保険サービスも登場している。簡単に見ていこう。

まず、デジタル時代の新しいリスクにはどんなものがあるだろうか。多くの人がまず思い浮かべるのが、サイバー攻撃により知らぬ間に機密情報や個人情報が漏洩したり、事業の一部やサプライチェーン（供給網）が寸断したりする事故であろう。また、こうした事故が企業のレピュテーションリスク（企業の評判を害する危険）へ波及することもある。

サイバー攻撃だけではない。人工知能（AI）を機器制御や顧客対応などに活用している場合、AIが間違えるリスクもある。また、クラウドサービスを使っていれば、そのトラブルで事業が中断する恐れもある。そのほか、企業は法規制に沿ったデータの保管やプライバシー保護なども求められ、そのリスクに備える必要もある。

リスクの変化はビジネス上にとどまらない。あらゆるモノがネットにつながるIoT機器が家庭内にも普及すれば、消費者も新たなリスクに備える必要がある。将来、家庭用IoT機器を購入する際、トラブルに対応した保険をつけるのかつけないのか、選択を迫られる機会も出てくるかもしれない。

世界のデジタルデータ量



(注)ゼタは1兆の10億倍=10の21乗
(出所)独調査会社スタティスタ

新たな脅威と新サービス

次にデジタル技術による新しい保険サービスを見てみよう。先に挙げた様々な新たなリスクに対応する保険が相次いで登場する一方、保険サービス自体もデジタル技術によって進化している。

自動車に搭載された通信機器を利用して安全運転しているか分析し、それに応じて保険料を割引く「テレマティクス保険」がその一つだ。また、加入者同士の小規模グループをネット上に作ってリスクをシェアする「ピア・ツー・ピア(P2P)保険」やスマホを使って必要な時に必要な期間だけ加入できる「オンデマンド保険」も海外を中心に広がりつつある。人工衛星データを活用して保険金を支払う「天候インデックス保険」は途上国の農家を支えている。

こうした動きはこれで終わりではない。ドイツの調査会社スタティスタによれば、世界のデジタルデータは今後一段と急増し、2025年には20年の約3倍まで増える見通しだ。それに伴って、新しいリスクと新しい保険サービスが次々と出てくると予想される。

もちろん、課題もある。その一つが保険料率の算出だ。保険料率は過去のデータに基づき決めているが、特に次々に手口が変わり、先が読めないサイバー攻撃のリスクの料率算出は困難だ。

保険の歴史をひもとくと、損害保険の原型は中世における海上輸送時の嵐や海賊などの危険対応に始まり、時代の要請に合わせて火災保険や自動車保険などへ発展してきた。今、社会から求められているのはデジタル時代への対応だ。この連載では、社会のデジタル化とそれに伴うリスクの変化や保険の進化などを取り上げていく。



うちだ・まほ
損害保険ジャパンで賠償責任保険などの商品開発・引受業務を経て現職。デジタル新技術、保険とIT（情報技術）を融合した「インシュアテック」、将来社会像などの調査研究に従事。